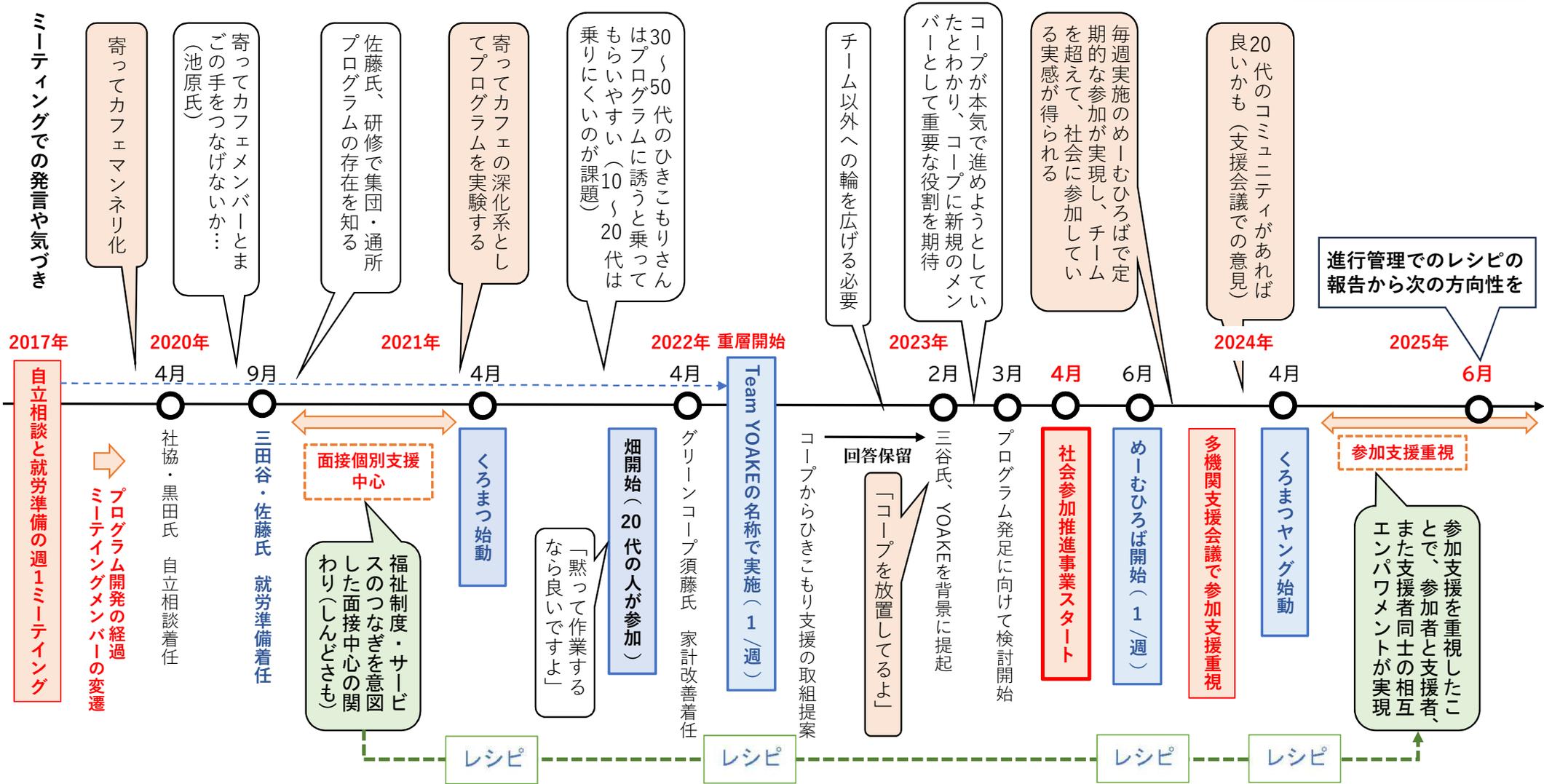


面接相談支援から参加支援への移行を生み出す場づくりープログラム開発を通じて (4つのレシピ)

レシピが示す支援者の思考の変化と効果



寄ってカフェからくろまつへ

背景 それまでの事業が徐々にマンネリ化し、ニーズとかけ離れてきていると感じたときには、新しい料理を作りたくなります。そんなときは週1回のミーティングで話し合い、みんなで悩みながら次の展開を模索します。とんとん拍子に話が進み実現できるときもあれば、そうではないときもあります。

冷蔵庫の奥で忘れられている材料も、新たなレシピでおいしいごちそうになることもあります。社会経験が乏しい方やひきこもり状態にあった方、自分に自信が持てず自己肯定感が低い方の一歩を踏み出す勇気があれば、調理が始まります。様々な材料をタイミングよく加えることで味わい深くなったり、思いがけず良い味に変化していきます。



材料

- | | | | |
|---|----|--|------|
| <input type="checkbox"/> プログラムとして参加できる定期的開催される場 | 1つ | <input type="checkbox"/> 「いつも同じ」を打破したいワーカー | 数名 |
| <input type="checkbox"/> 参加者が「やりたい」と思うプログラム | 多数 | <input type="checkbox"/> 実はいろんなことに興味がある参加者 | 1~4名 |

料理上のコツ

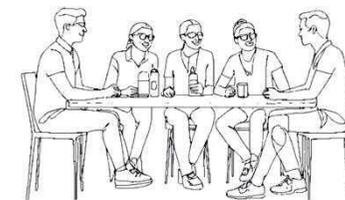
誰でも参加・相談できる「寄ってカフェ」では、支援対象である社会的孤立の人が参加してくることは少なく、いつも同じ状況でいつも同じ参加者となっていました。マンネリ化した状況を打破したいと思っているワーカーは週1回のミーティングで仲間と話し合い、他市で行われている「プログラム」を実施することにしました。

どんなプログラムがいいかは参加者の言葉にヒントを得て、やってみます。少しずつ出会い、面談を重ねてきたひきこもり経験者がやってみたいとつぶやいた言葉を大切に、パソコン講座や体操、コーヒーの入れ方講座などさまざまなプログラムを生み出しました。定期的開催される場があることは、参加者にとっても生活リズムを作ることになり遠ざかっていた社会に一歩近づいていくことにもなります。こうして「くろまつ」が始動しました。

それまで面接個別支援中心だった就労準備支援事業でしたが、集団プログラムとしてくろまつを始めたことにより、社会参加の視点を持つ事業へと展開することになりました。

金曜11時の team YOAKEという場の運営

背景 芦屋市における生活困窮者自立支援制度は、自立相談支援、就労準備支援、家計改善支援が全て異なる法人に委託されています。それぞれの事業を単体で見のではなく、一体的に支援提供し、社会的孤立からの脱却支援を目指し、重層事業の導入を契機に、team YOAKEの運営方法を整える。特徴としては、民間だけの「多機関協働」と言えます。新たなニーズに対応するプログラムを生み出すため、大胆なアイデアと失敗を恐れない民間のエネルギーが集積する場が必要です。



材料

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 一人仕事でしんどさを抱える個別支援ワーカー 5名 | <input type="checkbox"/> 雑談や愚痴、大胆な提起が許容される場の運営 たっぷり |
| <input type="checkbox"/> ちょっと狭い会議室っぽくないしつらえを活用 1つ | <input type="checkbox"/> 社会的孤立支援を目標と定め、みんなでやってみる |
| <input type="checkbox"/> 民間のみの多機関協働としての取組み | ”フットワーク”重視のリーダー1名 大きじ1 |

料理上のコツ

社会的孤立や制度のはざまの人を支援する生活困窮者自立支援制度のワーカーは、受託法人の中でも一人配置なことも多く孤立しがちで、まずはこれまでのミーティングに、新たな形式(社会的孤立支援という目標を掲げる「team YOAKE」)を加えます。

面接相談のみでしんどさを抱えるワーカーも、しつらえが工夫された会議の場(一つの鍋)の中で少しずつ居場所づくりの成果が足されていくなかで、持ち味が生かされ味に広がりが出てくるのです。

少し手狭な会議室っぽくない部屋でワーカーが自由に思うことを発言することで、支援における見立てや支援方針、新しい取り組みのヒントもここから生まれてきます。新たなプログラムを生み出すためには、既成概念や固定観念が最大の敵となります。上下や主従の関係とは異なるピアな関係の中で、一見雑談にも見えるコミュニケーションが大切であると保証してくれるリーダーの存在は、ワーカーたちにモチベーションと安心感を与えます。

最大のポイントは、生まれたアイデアを「とりあえずやってみよう」と合意形成し、少々材料が足りなくても実際にスタートさせてしまうフットワークにあります。たとえうまくいかなかったとしても、「またここで料理しなおしたら良いか！」という気楽さで一步を踏み出すことが許容される空間です。

チーム外のコープこうべ(めーむひろば)の参加の実現

背景 就労準備支援事業を開始して以降、利用者のニーズに合わせて居場所(くろまつ)や体力づくりのグループ活動プログラム(畑作業)等を創ってきました。それらの取組を進める中で、より「就労」のエッセンスが強く、利用者が安心して参加できる就労体験のプログラムを模索していました。そんななか、生活協同組合コープこうべより、保健福祉センターで「ひきこもり等の既存の施策でカバーできない人の就労体験の機会の提供に協力したいと考えている。」というお話がありました。でもすぐには実現できず時間だけが過ぎ、「このままではだめだ」と思ったteam YOAKEとそのリーダーの再発信から「めーむひろば」が動き出しました。チーム以外のメンバーを増やす貴重な契機となりました。



材料

- | | | | |
|--|----|---|------|
| <input type="checkbox"/> 「就労」を意識し参加できる定期的な開催される場 | 1つ | <input type="checkbox"/> 熱意と温かみのあるコープこうべ職員 | 数名 |
| <input type="checkbox"/> 見守る目を持つ買い物客、保健福祉センター職員 | 多数 | <input type="checkbox"/> 目の前の作業に一生懸命な人見知りの参加者 | 1~4名 |

料理上のコツ

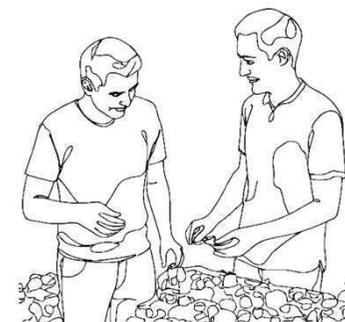
これまでの「くろまつ」や「畑仕事」とは異なり、買い物客の保健福祉センター職員やコープこうべ職員などチーム以外の多様なメンバーが参加することで、より一般社会に近い空間で様々な人とのコミュニケーションの練習の場ともなります。毎週実施することで、就労の場にある「同じ作業を繰り返す」、「少々嫌なことがあっても定期的に頑張る」ことができるようになってきます。

人見知りで不安感が強い参加者もコープこうべ職員にサポートされ、買い物客である保健福祉センター職員や地域住民に見守られながら、「失敗しても大丈夫」と思える安心できる環境から就労体験をはじめていくことがとても大切です。時には、普段はおおらかなワーカーから「ダメなことはダメ」と言われるピリッと辛いスパイスが効いた場面もあるのです。

コープこうべがもつ組織的なミッションが、社会参加推進事業の成果として、多機関との協働と市民の参加による地域福祉の取り組みに展開したのです。

くろまつ から くろまつヤングを生み出す

背景 team YOAKEで対応するひきこもり事例の多くは、既存の制度・サービスつなぎでは解決しにくいニーズを抱えています。社会的孤立の人の居場所としてスタートした「くろまつ」は当初、30代以降の人が集まっていた。徐々に10代や20代の人参加するようになりました。参加者が増えて喜んでたワーカーでしたが、ある日、40代の人から「自分の若いころと比べてしまい辛い」、20代の参加者からは「年上の人とはしゃべりにくい」など年齢を意識する言葉を聞き、「ニーズが違うんだ」と気が付きました。そして生まれたのが「くろまつヤング」です。



材料

- 意外と年齢を意識している当事者の本音 大きじ3
- 先輩に見守られながら、やる気を秘めた新人ワーカー 1名
- 気づきを分かち合えるteam YOAKE 毎週
- ヤングな社会的孤立さん 5名くらい
- 参加者がホスト役になれる社会参加推進事業 1つ

料理上のコツ

「くろまつ」の場での気づきを分かち合えるteam YOAKEの場での「意外と年齢を意識している当事者の本音」を、料理の具材として意識します。同じ思いを持つ参加者と同年代の新人ワーカーという組み合わせを、普段はおおらかな先輩ワーカーが、時には素早く決断することで格別の旨味がある料理が出来上がるのです。

「相談員との定期的な面接」も社会的関係の1つの場ですが、集団プログラムで自分と同じような経験のある他者と緩やかに接しながら、何かしらの作業ができる場面も適切です。

一つの鍋にニーズを何でもかんでも入れてしまっては、まとまらないときもあります。ひきこもり経験のある方がいつも“ゲスト”として居場所に参加しているのではなく、“ホスト”として参加できるプログラムを参加者の言葉から作り上げていく過程は、まさに社会参加の入り口になる取り組みです。

そして料理の決め手となるのが、プログラムの弾力的運用を可能にする「事業」の掛け合わせです。生活困窮者自立支援制度に「社会参加推進事業」を加えることで、集団プログラムをより多くの社会的孤立当事者のニーズに寄せ、事業内容を広げていくことができるのです。